11. なぞなぞ

民間歌謡の中になぞなぞがあって、韻語で事物を仄めかし、子どもや郷民が喜んで当てあい、勝負を競う。近人が著した『棣萼室談虎』はそれに言及して云う。 "子どものころ好んで道具をなぞなぞにした。身近で当てやすかったからであるが、村の嫗や牧童には伝来の作があって、互いに自慢しあい、言葉は鄙俗だが、時にはやはり取るにたるものがあった。" だが彼もそれらを著録はしていない。故人の陳懋棠君は小学校の教師をしていたが、八年前に、わたしのために越中の小児がするなぞなぞを収録してくれた、全部で百七十余である。最近また常維鈞君の集めた北京のなぞなぞを見たが、四百以上あり、最大の収録ということになるだろう。

なぞなぞの中には、ありきたりの事物の謎のほかに、文字の謎かけと難問などがあり、やはり同じ種類である。それらは文芸上では賦(叙事詩)の類に属する。叙事・詠物・説理はもともと賦の三方面であるからである。しかし原始の製作は、常に豊富な想像、新鮮な感覚、純朴で奇妙な連想と滑稽に富んでいるので、多く詩の趣味を含んでいて、のちの文人の灯謎がもっぱら繊巧と掛詞及び仄めかしで優れているのとは違う。なぞなぞは原始の詩であるのに、灯謎は文章工場での細工であるに過ぎない。児童教育でもなぞなぞはそれ相当の価値があり、一九一三年わたしは地方の雑誌に「わらべ唄の研究」 こという一篇を書いて、なぞなぞについてこう述べた。"謎話は物に体し微に入り、情思奇巧にして、幼児の知識初めて啓け、考索推尋するに、以てその心思を開発するに足る。且つ述べる所は、みな習見の事物にして、象形疏状、深切著明〔形状の描写は適切明瞭〕、幼稚の時代には、一部の天物志疏〔自然物についての記録解釈〕であるのみならず、その効用を言えば、ほとんど近世に提唱する自然研究にも比べられよう。"

現代の各国では、なぞなぞは老媼小児の暇つぶしの用でしかないが、古代原始社会ではもっと大きな意義を持っていた。なぞなぞとなると、たいてい真っ先に思い出すのは、ギリシア神話の足腫れ王 (Oidipos) の物語である。人面獅身のスフィンクス (Sphinx) は路傍に伏せって、道ゆく人に謎をかけ、当てられなかった者は殺される。その謎は"朝には四つ足、昼には両足、夕方には三つ足で歩くのはなにか。"足腫れ王はそれは人間だ、幼い時には這い、年寄ると杖をつくからと答えた。スフィンクスは謎が当てられたのを見て、岩の下に身を投げ自分から死んでしまう。『旧約』にも二つあり、サムソンの謎は当てられて失敗し(「士師記」)、ソロモン王はシバの女王の問いに答えることができて、賛美と手厚い贈り物を手に入れた(「列王記」上)。その次はアイスランドの古書『ヴェーダ』の二篇の詩がのべる、ファフトルトニール

(Vafthrudnir)がオーディン (Odin)大神に謎をかけ、みんな言い当てられ、それで負けてしまう。またアルウィス (Alvis)がトール (Thorr)の謎を当てられなかったので、失敗し、トールの娘を妻にすることができなかった。別の伝説では、アスラウグ (Aslaug)が王の試験を受け、彼女を彼のところへ来させるのだが、着物を着ていながら裸でなければならず、連れを連れていながら独りでなければならず、物を食べながら空腹でなければならないという。彼女はざんばら髪で体を覆い、犬を引き連れ、ニンニクの葉をかじりながら、王のところへ行き、それで褒められて、王后に立てられた。これは上の二つとは正反対で、難題を説く知恵があったために成功し

た例である。

イギリスの民間叙事歌の中にも、多くの謎歌および罵り合いの歌(Flytings)がある。『謎当ての騎士』の末娘は海よりも深いものは何かに答えることができたので、騎士の花嫁に選ばれた。もう一篇は死人が戻って来て、その恋人を一緒にゆかせようとしたが、いくつかの難事をやることができたので、放免されたことを言う。彼は彼女に地下の洞窟から火を取って来させ、石から水を絞り出させ、子どものいない処女の胸から乳を絞り出させる。彼女は火打石で火を起こし、氷の柱を握って溶かし、またタンポポを折って白い汁を出し、その仕事を完成させた。『妖精の武士』の主人公はいくつかの難問を設けるが、女性にもっと難しい題目を出され、逆に負けてしまい、彼女を自由にするしかなく、ひとりで地下に逃げ帰った。

中国の古史では齊の威王の時に隠を喜び、淳于髡が威王を説くに隠を以てし(『史記』)、又齊の無塩の女も亦隠を以て宣王に謁見した(『新序』)ことを言うのは、なぞなぞで成功した記録とすることができる。小説戯曲ではこうした例はしょっちゅう見られ、たとえば『今古奇観』の「李謫仙草に酔いて蛮を嚇ろかすの書」は、難題に回答するものの変奏である。朝鮮の伝説では、新羅の時代に(中国の唐代)中国は白玉の箱を一つ送り、中に何があるかを当てさせ、それによって国民の能力を試そうとした。崔致遠は詩を一首書いて答えた。"団団たる玉函の裏、半ばは玉半ばは黄金、夜々時を知るの鳥、精を含んで未だ音を吐かず"と。箱の中はもともと鶏の卵であった、途中で孵化したが、すでに死んでいた。(三輪環編『伝説の朝鮮』による)難題はすでに答えられ、中国は朝鮮にも人材のあることを知り、自ずともう朝鮮を侵略しようとはしなくなった。

以上に引いた物語は、すべて人間の意識におけるなぞなぞの重要性を証明するにたる。なぞな ぞの回答ができるかどうかは、個人にとって極めて大きな関係があり、生命の自由と幸福の存亡 とは往々にしてこれによって定まる。この奇異な事柄は決して偶然の類似ではなく、そこにはす こぶる検討すべき意義がある。イギリスのバーリング・グールド(Baring Gould)が『奇異の遺 跡』 ii でした研究によれば、有史以前の社会ではなぞなぞはおそらく一種の智力測定の基準であ り、人の運命を判定する指針であった。古人及び野蛮な部落ではいずれも種の選択が行われてい る。彼らは障害や衰弱があって人生の戦闘に適さない児童を見つけると、たいてい皆捨ててしま う。これはもっぱら体質による根拠だけれども、われわれはあるいは智力を根拠とするものもあ るのかもしれないと推測する。なぞなぞには人の運命を左右する力があり、つまりその事の影で あると言うことができる。こうした脳力の決闘は、事実正面からの証明もある。十三世紀初めの ドイツでは歌い手の競技が行われ、謎解き歌に負けたものは即刻死刑が執行された。十四世紀の 『ワルトブルクの戦い』(Kriec von Wartburg) という詩はそのことを記している。バーリング・ グールドは言う。"キリスト教の武士と夫人たちは[冷淡に]生命の緊迫した試合を見ることが できた。そしてキリスト教の武士と夫人たちは十四世紀にはなぞなぞに答えられなかった人間は その首で首切り人の刀を受けるべきであるということについて、何の不思議も感じなかった。こ うした思想状態は、古代の一種の遺跡と考えない以上、納得がいかない――その時、人間は同類 の中で生活しようとすれば、自分が智力でも体質でもその資格を備えていることを証明しなけれ

ばならなかった。"これは仮説でしかないけれども、多くのなぞなぞに関する疑問を説明することができ、われわれ歌謡を渉猟したり採集したりする人間の参考になる。各国の文人のなぞなぞがもともと遊戯の作であることについては、もちろんこの問題の範囲外である。

※初出:1922年7月1日『晨報副刊』

The most startling reminiscence of the old ordeal of brains is that of the Wartburg Contest in 1206 or 1207, under the Landgrave Hermann. The poem of the "Kriec von Wartburg" was not indeed composed till a century later, but that only makes it the more astonishing. It represents the minnesingers under the Landgrave contesting in song and riddle, and those who are defeated forfeit life. Christian knights and ladies could look on at a tourney in the lists with life at stake, and Christian knights and ladies in the fourteenth century thought it by no means a monstrous thing that he who could not answer a riddle should submit his neck to the executioner's sword. Such a condition of ideas is only conceivable as a heritage from a past when men had to show that they had an intellectual as well as a physical qualification to live among their fellow-men.

[『]紹興県教育会月刊』第4号、1914,1,20. いま『周作人散文全集』第1巻に所収。

ii バーリング・グールド (Baring Gould) 『奇異の遺跡』Strange Survival, Methuen, 1892. Ch. X. Riddles quot. p. 235.